

せ た か む い

発行・古平町史編纂室
文化会館 842・2590
第188号・平成17・5・1

年表で読む

古平の歴史

《94》

古平の各種漁業

古平では昔から鯨漁のかたわら各種の漁業が行なわれていたが、その多くは小規模なもので、その後、資源が枯渇したり、漁獲高の減少から全く行なわれていない漁業が多い。

それらの漁業については記録もほとんど無く、今では忘れ去られているものもあるので、わずかな資料だがいくつかを紹介する。

■ホツキガイ漁

ホツキガイというのは、和名・ウバガイの俗称で、生息しているのは寒流の砂泥地に限られていて、北海道でよく採れるので「北寄

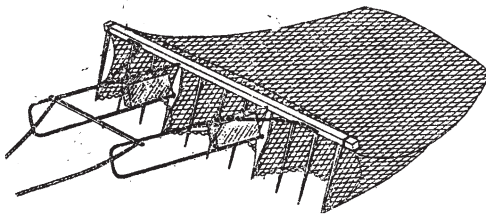
貝」の当て字がある。

古平でのホツキガイ漁は、明治四五年（一九一二）隻の舟が着業し、八尺を使つて七五^キ程を採取し、生売りして八円とある。

その後、チョペタン川口の沖でヤスで突き採取していたが、大正の末頃からは見ることがなくなつた、ということは、根絶やしにされてしまったということなのか。

■ホタテガイ漁

明治二〇年（一八八七）頃から、八尺と呼ばれる漁具を使つて採取していた。八尺というのは、網の口に桁けたといわれる木枠をつけ、桁につけた櫛（くし）歯状の鉄の爪で海底の貝を掘り出すのである。



↑ 桁網は、口幅の寸法から一般に八尺と呼びこられている。手漕ぎの舟ではとても引くとはできないので、舟の一方にアンカーを下ろし、舟の器具などを使って

古平橋の辺りには明治年間、貝柱の製造工場もあったといわれているが、乱獲によりその後数年で産出が激減し、古平からはすっかり姿を消してしまった。

日本海沿岸でホタテガイが採れなくなったので、その八尺をオホーツク海沿岸へ持つて行つて採取をしたと聞いたことがある。現在は養殖なので、今では八尺も無用になってしまった。

ホタテガイは関東地方の貝塚からも見つかつていたので、かなり古い時代から食べられているはずなのに、江戸時代の食物に関

する有名な本に、「その肉は最も白い。しかし味はうまくない。海俗（うみのたみ）もこれを食べない」などとあり、貝柱がうまいという記述がなく、その貝殻を容器や柄杓（ひしゃく）として使うことを強調している。

帆立貝の由来については、一方の貝を直角に開いて、潮に乗つて海上千里を走る……などという伝説まである。また、貝殻の均整のとれた二五本の放射状の筋が、扇のように見えることから海扇という漢字が当てられている。

■力二漁

カニの漢字は「蟹」で、解の字はばらばらにするという意味があり、食するときばらばらに解体して食べるということが字源になっている。

古平でのタラバカニ漁は、明治三三年（一九〇〇）年頃までタラ網などに掛かつてとれていたが、乱獲によるものか、その後は全く見ることがなくなった。

留萌市の記録でも、明治三〇年には八ツもの漁獲があったが、同業者が増えて乱獲の結果、激

家庭での調理法としては焼いて食へることが多かったが、ハタハタは「馬の鼻息でも焼ける」といわれるほど火のとおりがよく、また、中骨が抜けやすく、骨もわずらわしくないので子供にも向いていて、鍋物にするほか、いずしとしても賞味されていた。

大正一二年

▼十一月三日

起床六時、まだ電気がついて
いる。夜が明けたばかりのよう
だ。例により町中を一時間程散
歩する。気分も清々する。父は熊
さんと、今日も買った板倉の手
入れに行く。阿波君の亡母の一
周忌で招待を受け、一一時に
参詣する。客は七人程、三時に寺
参りに行き帰る。雨天で道路が
悪い。

▼十一月四日

起床六時、寒い日だ。④か
ら柿を送ったと言ってきたの
で、子供等は楽しみにしている。
⑤のおまさん、去る四月、嫁入
りしたとのこと。前途幸多かれ
と祈る。夜、④で部落会の会合が
あり、九時半に終わって帰る。

▼十一月五日

起床六時半、昨夜はずいぶん
寒いと思っていたら、今朝、起き
て見たら一面の銀世界、屋根に
は一寸ぐらゐも積もっていた。
店はタコ縄やアバ縄が売ってい
く。父は大工と板倉の手入れ中

だ。サバ一〇銭に六〇尾だとい
うので、一円代買う。鮭五尾で六
円五〇銭で買う。中おつかさん
が来て、妻は真綿取りを習う。

▼十一月六日

朝から雪降り、一〇時頃から
吹雪になり、寒中のようになっ
てきた。これが根雪になるので
はないか。午後、銀行へ行き預金
する。帰途、今中アメ屋に寄って
アメを買い、③に寄り子供達に

高野名幸作さんの日記から

[99]

当時の世相を見る

やる。しばらく話し四時頃帰る。
どこも道路が悪い。夜、⑥鶴間へ
行き、しばらく話して一〇時半
帰る。

▼十一月七日

起床六時半、浜へ出て見る。昨
日の時化もおさまってナギてき
たので、汽船二隻が出帆した。入
船町の寺田さんの一九歳の次男
が死亡したという、若い人なの
に惜しいことだ。葬式を送り

に行く。雪でザブザブになった

道路を長靴で行く。大謀ではサ
バ、鮭、マグロなどが揚がる。

サバを製造する人が多く、値段
もそれ程安くない。三〇分程早
かったのに八に寄り、しばらく
⑥の話などをする。葬式を送り
帰ったのは一一時半、午後一時
から困支店で火防組合の協議が
あり行く。二〇余名が集まった。
三時から町中を巡視する。この

日午後一時頃、新開町で自殺す
る事件がある。どんな事情か知
らないが、とんだことになった
ものだ。夜から豪雨になり、雪も
消えた。

▼十一月八日

昨日から今晩までの雨で、町
中の雪もすっかり消えた。また
小春日和だ。朝、富丸で帝電の藤
野氏が、余市へ出発するので見
送りする。ナギで天気はよく、一

〇月頃の天気である。漁船も皆
出たのどかな日和だ。大謀はサ
バ、鮭が少々とれる。本年は大漁
ということがなく終わりそう
で、元氣が見られない。夜、阿波
君が細君と子供を連れて遊びに
来る。茶の間で一時間程話して
帰る。

▼十一月九日

快晴、今日も小春日和の天気
だ。六時半起床、悦三をおんぶし
て浜へ出て見る。古英丸がちょ
うど小樽から入港するところ、
共栄丸も⑥の浜に着いている。

熊さんは朝食後、早々に農園行
き。父は重助大工と3号板倉へ
行く。佐渡からの柿が共栄丸で
着いたが、五個ばかりいたんで
いた。好天気なので、妻は⑥の農
園へ行き、池へ金魚を預けて来
る。帰りに菊などの苗を買って
来たのでそれを植える。夜、長見
さんの通夜に行き、帰途⑥に寄
り、話をして一〇時帰る。暖かい
夜であった。

▼十一月二〇日

六時起床、浜辺を散歩する。ヤ
マセが吹き時化模様だ。本陣の
浜にタラ釣り船二隻が入って

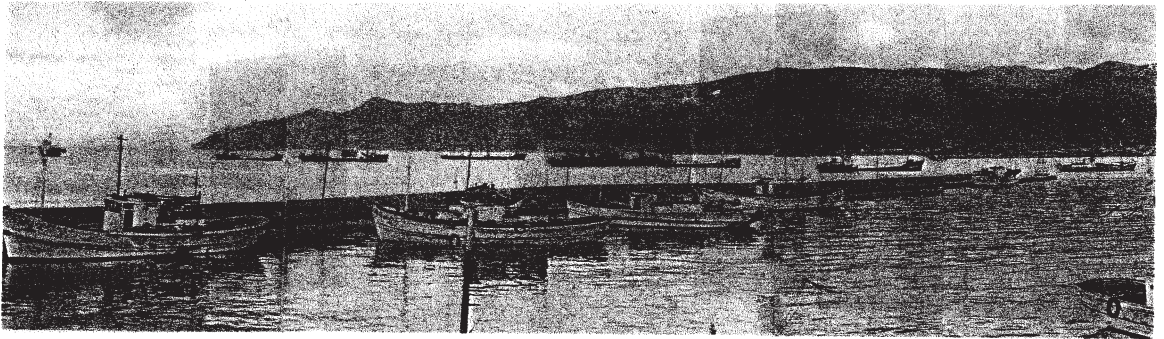
る、行つて見たら何れも大漁小樽へ行けば、ひとナギで二〇〇円余りになるとのこと。この頃の大漁で値段も良し、カレ網連はどこも景気がいいようだ。午後一時、長見さんの葬式送りに行く。神葬である。午後二時から大雨になる。カゼ気味のようなので早く休む。

▼一月二二日

朝起きて見れば一面の銀世界で、雪も盛んに降っている。今度は根雪かも知れぬ。父は熊さん、重助大工と3号板倉の普請に行く。一〇〇円で買つて安い買い物だと思つていたが、この間からの修理などに一五〇円もかかり、結局合計一五〇円にもなつてしまった。その代わり立派な板倉になった。海は時化になり、二千トン級の汽船一隻が避難している。

▼一月二二日

起床六時半、例によつて海岸を散歩する。この頃はずいぶんと寒くなった。大謀も近く揚網するとのことだ。店はキユリ糸、綿糸などが売れる。一時半頃、悦三を連れて浜へ出て見る。意外に



↑ <古平湾内に停泊している避難船> 古平港は入江が深く、丸山岬が北西の冬の季節風をさえぎり、天然の良港として、北前船の時代から海の交通路の要衝として利用されてきた。

も五、六〇〇トンから三、四〇〇トンぐらいまでの汽船が九隻も停泊している。実に壮観だ。悦三の汽船好きは目を丸くしてビックリ。沢山の汽船に大喜びだ。港外では時化模様になるかも知れない。悦三は、一時間も見てもまだ帰るとは言わぬ。そのうちに余市から富丸と外浜丸も入つて来る。実に日本海海戦のようだ。夜になると、汽船の電灯が賑やかだ。それに十四日の月がこうこうとしていてよい夜だ。

▼一月二三日

起床六時半、まだ暗い。悦三を連れて浜へ出て見る。昨日は九隻も停泊していた汽船が皆出港して、浜はさびしい。悦三へ靴を買つてやつたら喜んで履いている。今日は小春日和で、子供等も新嘗祭(にいひき)現在には勤労感謝の日で学校も休みなので、浜へ遊びに来ている。郷社(こうや)琴平神社)では新嘗祭に支庁長が供進使としてお出でになり、式があるとのこと。父と熊さんは、出面五人とリンゴの肥料やり、サバ、鮭が漁があり、売りに来た

ので買ったが、今年程サバと鮭を買った年はない。店の方はまだ閑散としている。三、四年前だとカレ網が大流行でずいぶん売れたが、ここ一、二年はない。新規の網は入らず、本年はいつになくさびしい。夜七時から、③で和合会の集金の件について協議する。

▼一月二七日

昨日来の雪も消え道路の悪いこと、どこも歩かれぬ程だ。起床早々水野さんの三男が入営するというので、餞別を持参しお祝いに行く。今日は困支店の貞治さんも入営で出発するので、見送りに行く。家の中は人でいっぱいだ。級友会から頼まれ、「祝入営高野貞治君」とのぼりに書く。九時半出発。新地から大ハシケ(解)を引いて来て、勇ましく出発する。店は刺網の客で忙しくなった。網一、八〇〇間、ほか現金で二八〇円程出た。のち吉井方で、土場の横山老人の葬式があり送りに行く。二時に終わる。夜は、浜谷老父死亡で通夜に行く。道路の悪いのには閉口する。杏に寄り一時間ほど話し、一

○時に帰る。帰ってから帳簿の整理をする。東洋へ網二万間、七二で注文したら、今日電信で七七ときた。早速「ニマンカウネ七五タノム」と返電する。

▼一月二八日

珍しい天気快晴 小春日和だ。母の命日で、和尚さんが来られる。亡き母は、わが家にとつてのありがたい人であった。また、自分等にとつても慈母であつた。せめて一〇年は長く生きてもらいたかつた。孫等五人もおつたら、どんなに喜んでくれたことだろう。熊さんは目録配り、雨降りで暖かい夜だ。

▼一月二九日

昨日の暖かさに引きかえ、今日は寒風が身にしむ。地面もカンカンに凍つて、チラチラ雪も降り出す。これで根雪になるか。入船町と美国から網の客があり相当売れる。東洋から一昨日「七五タノム」と返電したら、「七六ヒキウケタ」ときた。綿糸は一〇日前まで二六〇円ぐらいたつたが、今日は三〇〇円に暴騰している。七六でも仕方ないか、二万間注文する。

▼一月三〇日

昨夜来の寒さ、いよいよ寒中らしい。地面も固く凍り、全く根雪らしい。一日中チラチラ雪が降り、二、三寸積もりすつかり冬景色となった。トミ、一昨日来腹痛で、昨日学校を休んで病院へ行き、心配していたが今朝から全快、ケロリとして元氣よく学校へ行き安心した。家族が割と病氣もせず、皆壮健なのは実に幸福、神に感謝せねばならぬ。今日は朝から店が忙しい。カレ網、鯨網など切れ間がない。熊さんは掛け取り、共立大謀一、〇〇〇円を始め、合計一、二〇〇円程が入金した。夜に入り雪はますます強く降り、これでいよいよ根雪だ。

▼一月一日

起床七時、この頃は寒いので浜への散歩は見合わせた。今朝は雪が七、八寸も積もっている。いよいよ冬景色となる。熊さんと父と私で倉の片付けをし、漬物樽四樽も、裏庭から倉に運ぶ。裏二階も片付いた。店は綿糸、キウリ糸などが売れる。沖村と入船町の大謀は揚網したとの

こと。△の大謀だけはまだ投網している。今日もサバ、鮭など売りに来る。サバを一円代買、夜に焼き干し作りをやる。夜に入りますます雪が降る。去る二九日根室で大火があり、一〇〇余戸が焼失、焼死六人という。火の用心が何よりだ。悦三がハシカのような。今朝あたりから顔一面に出ているようだが、割と機嫌がいい。

▼一月二日

今日も朝から雪が降り、寒中の如し。いよいよ根雪となった。長らく働いた自転車も明年春までお休み代わつてソリになる。夜、美国から改良六〇〇間ほか、群来村からも客が来る。合計一三〇〇円程売る。悦三、昨日からハシカだが、軽いようなのでよかった。夜、佐渡の五、六軒へ焼サバ、塩干しサバを送るので小包をこしらえる。

▼一月三日

朝から雪降り、店は相当忙しい。一二時頃、学校の小使さんが文治を背負つて、受け持ちの松岡先生が付いて来た。聞けば、学校の運動場で遊んでいるうち

に、足を怪我したとのこと。若林かご屋に見てもらつたところ、大したことはないようだと言う。とんだ災難だ。湿布をして休ませた。夜、和合会の件につき原田さん、③に来てもらい、帳簿の下調べをする。九時頃終わる。

▼一月四日

朝から雪が降り、寒さもずいぶん厳しくなつた。足袋を二足はいても寒い。文治は昨日の怪我で時々痛むと言うので困る。店は美国からの刺網の客が来る。夜、原田さん宅で和合会の例会があり、九名が出席する。協議の結果、利益の配当は明年五月に行うことにした。東洋漁網へ改良網を照会したら、一〇〇間、一二円と返事が来た。ずいぶん高い。二、三日前には一一円八〇銭で売つていたからバカらしい。これでは一二円五〇銭くらいで売らなくてはならない。

▼一月五日

一日来の寒気も、今日はずいぶんとゆるんだ。昨夜、和合会の掛け金払い戻しのことについて、事務をするのに原田さん宅へ行く。午後、役場で営業税届に

ついて協議があるというので行く。夜六時から梅野さんで部落会の会合があり行く。九時に帰る。文治の足の怪我、時々痛むという。二、三日経過を見て、良くなければ小樽へでも連れて行くつもりだ。和合会の掛け金今日六〇〇円の払い戻しがあつた。知らず知らずのうちに相当の額になるものだ。

▼一二月六日

文治は、昨夜は足の痛みもなく眠られたという。だんだん良くなればいいが、和合会の払い戻しの事務で忙しい。アバ縄ポツポツ売れる。綿糸は高く三〇〇円だ。夜、杏へ遊びに行き一時帰る。

▼一二月七日

起床八時、暖気で雪が解ける。入営兵が今朝出発するので、役場前で見送る。沢山の見送り人が来ている。文治の足の方も少し良くなったようだ。支店、金平で見舞いに来てくれる。この分だと小樽へ行かなくてもよさそうだ。父はこの頃気持ちがいいと言って、何かと仕事をしている。今夜は魚串を作っている。

▼一二月九日

文治を小樽へ連れて行くことにした。熊さんに背負ってもらい、一〇時発の富丸に乗り、すぐ余市発一時の汽車に乗る。二時頃小樽に着き、早速整骨院に入院する。

▼一二月一六日

九日から一六日まで、小樽整骨院に文治の付き添いで滞在する。

▼一二月一七日

足の痛みもないと言うし、大分良くなったようなので、文治を病院に預けて、ひとまず帰宅する。

▼一二月一九日

一八日から一九日、帳簿整理など店の事務をする。

(一二月六日～一二月二〇日まで日記帳に落丁があり、その間欄外に記入している)

▼一二月二〇日

快晴、雪は少しも降らず、町も静かだ。正月が来るというのにこんなに暖かい。雪の少ないのは一〇余年来ない、珍しいことだ。先日は一〇日間程も不在だったので、店の帳簿整理などで

忙しい。父は、平次男の婚礼に招待されて行く。月夜で静かだ。

▼一二月二一日

早やモチつきがくるというのに、町では雪が消え、雨が降り出して、一月中旬のような天気だ。熊さんは家のすす払いをやっている。私は店番と目録書きをやっている。父のおつかさんが来て、佐渡の④のこと、どうなったのかと尋ねられた。しばらく話をして帰られた。皆さんに心配をかけて済まぬ。小樽で入院中の文治へ電話をかけた。足の調子も良いとのこと。一四日までには迎えに行くつもりだ。八時頃から雨になる。

▼一二月二五日

九時出発の富丸で、文治を整骨院まで迎えに行く。途中、余市で大謀代金七七〇円余り請求に行く。今年は大謀が不漁なので、持ち出しになるからと半金だけ支払いをしてもらう。七清水へ寄り、刺網代金のうち五〇〇円だけ入金する。一時九分出発の汽車で小樽へ行き、二時過ぎ整骨院へ着く。岡崎や田に手伝ってもらい、明日、退院の準備やら

買い物などをする。

▼一二月二八日

二七日、文治が退院する。二七日午前一〇時三〇分頃のこと、摂政宮殿下が第四十八回帝国議会開院式に臨まれるため、自動車で赤坂離宮を出発。虎ノ門に差しかけた時、アメリカ屋の電柱の陰から、突然一人の青年が飛び出して来て、一人はレインコートの下からステッキ銃を取り出し、前から二輛目の殿下の自動車を目がけて、〇〇と叫びながら発射したが、弾はガラス窓を破壊しただけで、殿下は無事だったとのこと。

▼一二月三〇日

今日も朝から大雪、寒さも厳しく硯の水も凍っている。いよいよ大正一二年もあと一日で終わりだ。店はこのところ忙しい。⑤さんで元中から買った宅地、かねてから瀬戸さんの仲立ちで交渉中のところ商談がまとまり、今日、早速登記、雪解けを待って造作すること。

——大正一二年終わり

(続く)

風は山背なのだろう。波は打ち消され、ウロコ状の海面が沖に向かって広がっていく。石狩川の河口が近く、茶色の川水と青い海水とがせめぎあつて、なんとも不思議な模様を描いている。砂浜には、釣竿が立ち、身を固くして絵のように動かない釣り人が点々と続いている。

皐月の浜は、風はまだ冷たく、つい身を縮めてしまうのだが、なぜか、わくわくする。

小学校六年の夏、ここでキャンプ大会があつた。三日間のお寺での生活は、新しい友達とのあつという間の出来事だったのに、半世紀が過ぎてても鮮明に生

★編集雑記に寄せて★

□今年の大雪にも町なかの雪は意外と早く解けて、終わってみると、「何であんなに雪の始末に苦労したのか」と、思うほどでした。

□去年の暮れ頃から今年にかけては、まさに地震列島でした。昭和一五年の夏、積丹半島沖を震源とする地震があり、古平では震度3程度の揺れで大騒ぎ、幸いなことに人や家屋にもほとんど被害はあ

きている。砂だらけの体で銭湯に押しかけた。昼寝の時間にお寺の縁側で騒いだ。一つひとつがよみがえってくる。だからこの砂浜にひかれるのだろうか。

六〇〇字エッセー

砂丘の情景

小川 光 男

鮭料理の「あいはら」が、昔の賑わいから取り残されたようにひっそりと佇んでいた。あの時、バスに乗って砂浜の散策を楽しんだあと、「あいはら」に

立ち寄った。野菜の苦手な連れのおいしい程のひつしな箸遣いの情景が映った。そのうち、東郷青児に似た画風をもつ、地元画家の素朴な画廊に立ち

寄った。今は跡形もないが、漁師の家そのままで、周りの風情と違和感のない画廊であつた。熱いコーヒーを出してくれたご主人から、帰り際、「お幸せ

りませんでした。が、ローソク岩が欠け落ちたといわれています。平成一五年の震度3の地震では、津波が来るのでは？」と、古平温泉の-high台に避難する車が列をつくりました。どうも年号の一五年と

いう年は鬼門のようです。

□それから間もなく福津組の社長さんとお会いしたら「ウチでは全然感じなかった。港町でもウチの辺りは特に地盤が固いから地震には強いよ」とのこと。だが本当は

「ウチの工事だったら地震にも大丈夫：：自信があります！」と、言いたかつたのでは――。

しかし、チョベタン川から廠島神社辺りは厚い岩盤で、海岸を見ても磯がせり出していて、一帯の地盤が強固であることも確か。こ

と地震に関しては、丸山町に住む人達にとってはうらやましい。

□去る二月、道内の現存する信金では、創立が一番目に古いという古平信金の合併がありました。大

に」の声を背中で受けた時、自然と二人の手が重なった。あの汗ばんだ感触が、固い誓いだつた筈なのだが、それはなかなか夢だつた。

秋の名残りの枯れすすきが、風に身を任せて揺らぎ、聞き取れぬ程の小鳥のさえずりが、心の奥底の感動を目覚めさせてくれたようだ。

苦節六十年の生き様と言わぬまでも、その時々に出会つた多くの人との感動を、増幅させ、大事にしていきたいものだ。落日の茜とかさなつて映えるハマナスの咲く頃に、この砂浜をまた訪れようと思った。

正四年(九五)の設立ですから九〇年の歴史があり、その間地域の産業の育成や発展などに大きな足跡を残しました。時代に即応した北海信金との惜しまれての合併でした。合併による店舗の整理などで、越中理事長さんから蔵書の寄贈がありました。所轄官庁や関係する金融機関などからの貴重な資料で、こちらからお願いをして頂戴いたしました。ご好意に厚くお礼を申し上げます。

戰中彈

泣き笑いの
樺太漁場体

戰後對彈

吉野慶一郎

りました。

こんな中で楽団仲間たちと、密かにラジオで故国の情報を聞くのを隠れた楽しみにしていました。

焼野が原と化した東京にヤミ市が出現し、飢えた人々が殺到して大繁盛しているとか、食糧の買い出しに血眼の群衆で、列車がいつも超満員だとか、戦災

孤児が街に溢れているとか、外地からの復員兵や引揚者が続々と帰国しているとか、悲喜こもごものニュースや尋ね人の時間などを聞いている、その度に一喜一憂していました。

しかし、暗いニュースばかりではなく、反面、明るい話題も聞けました。

早くも文化産業が復活し、新しい映画が製作されたり、レコード会社も新しい流行歌を作り始め、人々の心に元氣と安らぎを与えようとしていることも知

それらは毎晩、演芸放送の時間
に流れてくる明るいメロディ

と共に、新鮮でさわやかな歌声の並木路子のリングの歌でした。暗い世相を吹き飛ばすような明るい歌に誘い込まれ、みんなでラジオで聞いて覚えましました。

「並木路子さんってどんな人か、せめて写真でもいいからお目にかかりたいもんだネー」と、姿の見えぬ憧れの歌手の面影を夢見ながら、寄ると話題の

中心でした。

その後、野田町では特に変わった事態もなく、一見したところ、どうにか日々平穩には過こしておりましたが、この先一体どうなるのか、一切が不透明で不安もあるのですが、考えたところでどうにもなるものでもなく、結局、その時はその時と先延ばしにすることで、いったんは気持ちも楽になります。

やがて樺太も冬の季節に入り、流水も近づいて来るので漁業も切り上げ、船は上架し、漁具の始末も終えて、敗戦という悪夢の中を駆けつりまわったような年に別れを告げました。

例年だと、休漁期間でも明年の出漁準備で正月も多忙、加工場も休まずに、第二次製品の仕事に多忙な時期なのですが、今年は何をすることもなく共に休業となりました。

例年、この頃は年の瀬を締めくくる大売り出しとクリスマスが重なり、賑やかで楽しい歳末風景

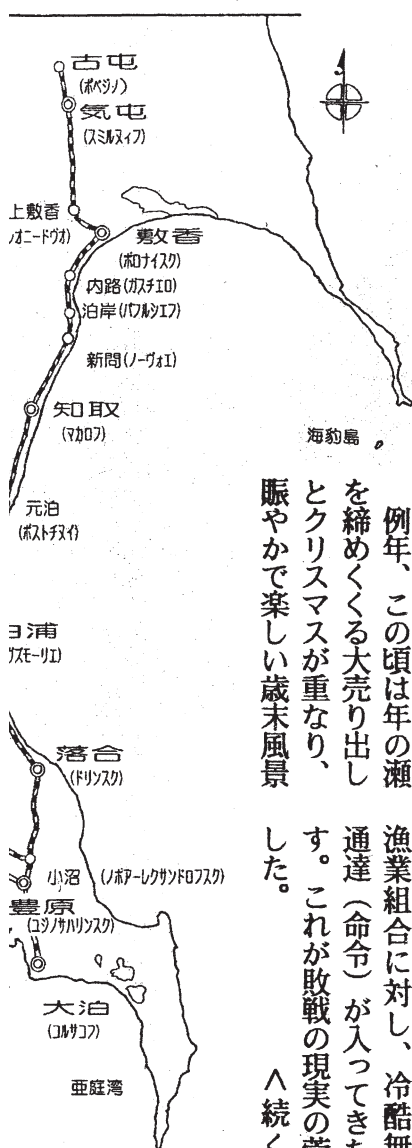
が展開されるのですが、今年は商店街には看板も旗も立たず、スビーカーから流れる心の弾むジングルベルの曲も聞こえず、菓子店のウインドーには見るだけでも楽しいデコレーションケーキの豪華な姿も無く寂しい限り。サンタクロースがやって来るには程遠い雰囲気、売る物も造る物も無い今は、当然と諦めるだけです。

雪と寒さは日ごとにつのり、流水の接岸も時間の問題、先が見えぬ長い冬をジツと耐え、春を待つだけの空しさに腹が立つばかりです。ただ週に一回の映画見物だけが、心を癒してくれる最高の楽しみでした。

冬来たりなば春遠からじ
淡い望みに夢を託し、無事に終
わつてくれと祈った年の暮れで
したが、それをあざ笑うかのよ
うに突如、ソ連から私達の野田
漁業組合に対し、冷酷無比な
通達（命令）が入ってきたので
す。これが敗戦の現実の菅田で
した。

△続く▽

華太都市名図



山中に陣地構築へ続く

衛兵勤務は四日に一回まわってくるが、空いている三日のうち、二日間使役に駆り出される。

私は特別にラッパ手の応援にやつて来たので、使役に出てくれとは言つてこない。

毎日ぶらぶらと遊んでいるのも案ではないが、皆から嫌われる衛兵勤務も、私には馬に乗れるという楽しみがあった。

三週間くらいした頃、樋口ラッパ手の体調が良くなってきたので私は上敷香に帰ることになった。

これでやっと退屈から解放される。いい気分が気屯から汽車に乗り、上敷香の駅に着いた。早速、上敷香の小学校の

めを処置であつた。

南樺:

老兵の綴り方

あ、樺太国境守備隊

29 橘 義 春

先生をしている伊藤君を訪ねたところ、女の先生が出て来て気の毒そうに、「伊東先生は先日転任されました。」とのことだったので、がっかりしたが、泉部の中隊の小屋に三週間ぶりに帰った。

七月の初めに、各中隊ごとに陣地構築の現場の近くに幕舎を張る命令が出た。これは中隊の幕舎から、陣地構築の現場まで相当の距離があり、歩く時間の口

私も相棒の加藤と二人で小隊の炊事をやることになり、炊事場を作つて炊事を始めた。小隊長も吉田少尉から藤山曹長に替わった。

八月四日頃と記憶しているが、突然、陣地構築の中止命令が出た。なぜなのか、私達兵隊には分からないが、いつでも出勤出来るように整理をしておくようにとのことであつた。

いろいろな憶測が兵隊達の間から出た。

沖繩奪回に行く説、いや南方だ、いや千島だなどと、作業がなくなったので、幕舎の中では退屈しのぎに吾気な無責任な話に花が咲いていた。

皆が汗水流して作った陣地を未完成のまま放棄するなんて、これは何かきつと重大なことが起きたのかも知れない。私はそ

んな予感がした。炊事の方も、何が起きてもいつでも対応出来るように相棒の加藤にこの重大さを話し、出勤に備えて二人で準備を完了した。

ソ連軍の国境侵略

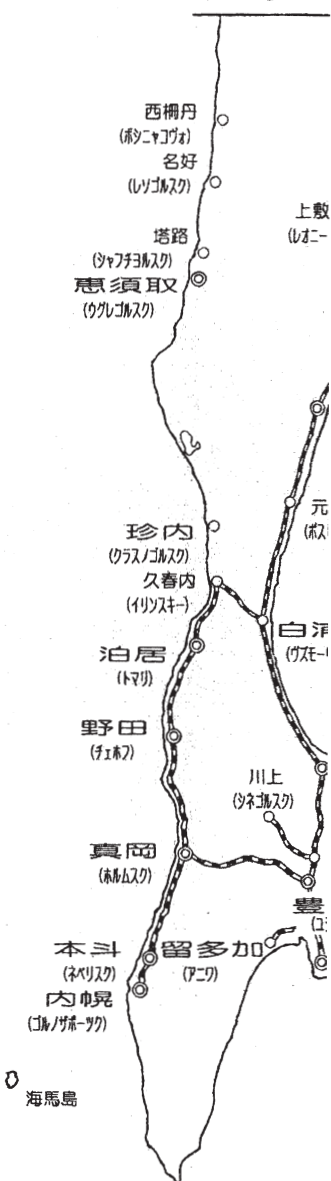
一〇時頃、昼食の準備をしていたら、藤山曹長が深刻な顔をして炊事場にやつて来た。

「橘、ソ連軍が国境を突破したらしい。詳しいことは判らないが、ラッパ手として大隊本部まで、伝令二名を連れて行つてもいい。誰でもいい、お前の好きな者を連れて行つてくれ」

「わかりました。ただ今昼食の準備をしておりますが、残った米はどうしますか。全員に分配しますか」

「よし、全部炊いて分配してくれ」

へ続くV



幼な子と共に

大 澤 文 子

路の臺：菜の花：春の香り等、新聞、テレビではいち早く報じているのに——北国は遅い。だが確実に春は近づいていくのだ。

そんな時、ふーと想い出すのはあの頃のこと。

何故……か。果てしなく広がる日本海、対岸遠く増毛、雄冬がかすむ夕近く、私共一家は古平の住人となった。

余市の船着き場まで見送りに来てくれた老い母は、幾度も手を振り、

「お前たちは離れ小島へゆくんだね……気を付けてなア」と泣いた。

「ごめんネ、お母さん——仕方ないの……」

ひそかに心の中であやまり、そして私も泣いた。長男が満四歳、長女が二歳の昭和二十二年の晩春の寒い日だった。

その頃、古平町長だった舅（ちち）から、

「長男だから古平へ……」との要請を受けていたからだった。

新潟生まれの私は、小学校二年の頃、教職についていた父の転勤により、新潟から連絡船にて津軽海峡を渡り、札幌に着いた。酔うこともなかったが。

余市からの金華丸は小型の定期船。幼な子二人は船酔いで終始ぐずり続け、船酔いのわが身をいとうひまもなかった。

長女をおんぶし、長男の手をひき、はじめて古平の地を踏みしめた時、

「ああこの地が新潟、札幌に次ぐ第三の『ふるさと』になるんだなア……」

と、深く息を吸った。すがすがしい海の香りが身の内を駆けめぐり、幼な子の手を強く握りしめた時、何故かふーっと涙がこぼれたのを覚えている。

はじめて眺める鰯場の風景、軒下に吊るされた助宗がカランカランと音をたてて浜風にゆれていた。

漁網がかけられているのは、鳥からの被害を守るためとあとから聞いた。何もかもが珍し

く、目まぐるしい日々が続く。だが幼な子達はずくに海の町にも慣れ、同じ年頃の子達と走り廻り、遊び呆けていた。

隣の若松キヨさんもすぐに声をかけて下さり、何かと教えていた。だきうれしかった。

一番の苦手は水のこと。毎日の必需品なのに水道もポンプもない。

「浜通りのね、坂田さんの脇にある小屋に掘り井戸があり、木の柄のついたポンプがあるから、そこへ汲みにゆくんだよ」と、若松キヨさんが教えてくれた。日に幾度となく、主婦達は大きなバケツ二個に水を満たし、天秤棒で軽々と担ぎ、家の水がめを満たすのだという。

「わたしだって……」

勢いよく天秤棒を担いではみるが、幾度やってもガチャン！と大きな音をたてて肩からすり落ちる情けなさ。

「こうやってごらんよ」

若松キヨさんが、手とりあしと教えて下さるがやはりだめ。仕方なく、バケツに半分位の水を汲み入れて両手に下げて運ぶが、砂やこみが入り使いものにならない。天秤棒を担げる人達をどんなにうらやましくおもっ

たことか。見かねてこっそり助けて下さって若いひと。今でも感謝の心を忘れてはいない。「ありがとう！」と。

いつかその労苦も忘れ、ギーコ、ギーコと音をたてて汲み上げるポンプがつけられた。

その後、待望の水道もつき、テレビもつき、町全体の主婦達に活気もみなぎり、うれしく思った。

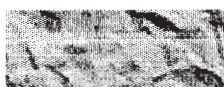
私は、幼いころより読むこと書くことが大好き。この地へ来て、「海は生きている」しみて思った若かりし頃である。また「時化あとの小岩にぶつかり、石礫の泡のような美しさを『浪の花』というのよ。海岸近くに立ちこめる白い湯気のようなあれは『けあらし』というのよ」と、ささやいてくれた歌びと。早速、道新歌壇の中山周二氏、芥子沢新之助氏選に、古平の浜を詠み投稿したあの頃……楽しかった。

この度、「古平のひととなつた頃の思い出を書いて……」との声があり、今からそうそう五十七、八年前のことになったけど、この夜ベンをとった。窓高く積む雪のかすかなくする音に耳をかしながら……。

札幌通信 第30信

サメだけは知っています

吉 川 義 雄



漁師の家で生まれ育っているから、古平の家で生活している間、古平の海で漁獲された魚のことは全て承知している、と思いたいのだが、自分でも悲しくなる程魚のことは知識がない。

今でもヒラモノの名称は、古平でデックイと呼ばれたヒラメと、総体が常に赤いアカガレぐらいは分るが、あとは何でも「カレイ」で片づけなければならぬ。

間違つて笑われたくないから、札幌の食卓では、私よりも魚の種類を口に入れている者達の前では、食べる前から、軽々しく魚の名称を口にしないことにしている。

魚の前では常に謙虚で、慎重な態度を崩さないことにしている。これは、古平でも札幌でも、数度にわたる手痛い失敗の結果であり、漁師の倅を妙に自負している者の、ある種の宿命かも知れ

ない。

食卓にそのままの姿で上がってくる魚は数少ない。衣を頭から尻尾の先まで被つても、チカは易々と見破れるから好きな魚だ。

肉片だけで皿に盛られても、赤ければマグロ、白ければヒラメと、めつたに間違わぬし、えび類は古平でも数少ないし、種類なんか知らなくても恥にはならない。イカはけっこう種類が多いようだが分るわけがないから、タコ同様、他は言わないことにしている。

にしんが終わると、前浜に大謀網が建ち回遊魚が揚がる。普通の網では獲れないものばかりだから、珍しい、時には大騒ぎになるような大物も水揚げされる。

大マグロがサンパにどつと積まれ、船から一尾ずつ揚げられる

騒ぎも見たことがある。食卓でその切り身を見るたびに、口から出かかるマグロの巨大さをのみ込んでいる。

マグロの種類が覚え切れぬ程の数におよぶことなど、後々になつて知った。

記憶の中でウズいている魚に、サメがある。私の年齢から逆算すると、多分、昭和四、五年頃と思われるが、サメ漁をしていたわが家の船が、築港の上に網を上げ、サメを網から外す作業を何回も見た。

サメの腹を踏むと、子ザメが腹部から飛び出してくる。それだけではなく、子ザメの腹部には丸く黄色のエサまで着いていて、およそ魚の生態では他に見たことのない姿が珍しく、次々と何匹もの子ザメを飛び出させた。

丸山川が海にそそぐ辺りに「五太郎の浜」があり、そこにあった大きな無人の空き家が、急に加工場に変わった。

家の前の広場には、馬車でサメが運ばれ山になった。工場に変わった家の中では、何やら多くの人達が立ち働いていた。

家の前の広場は流れ作業の最初の部署となり、幾つかの台の上では数人の男がサメを器用にさばき、白い肉塊だけがどンドン工場内に運ばれて行った。

子供達の興味は工場内の作業であり、叱られることを覚悟で、裏の通用口から工場にもぐり込むことに成功した。

外でさばかれたサメ肉は、中でさらに細片にされ、うなりをあげて回転している石ウスの中で煉られていた。

煉られた肉は、天井に届く円筒形の蒸し器に入れられ、その根方からは鉄棒にからみ付いたチクワがどンドン取り出されていた。

適度に赤くなっている炭火の長い炉の上では、回転しながらチクワが焼かれ、適度に色づいたものだけが取り除かれ、製品として箱詰めされていた。

物かげで熱心に見ている子供達のところに、焼きそこないのチクワが何本も空巾を飛んできた。その向こうに、近所から来ている女工さんの笑顔があった。

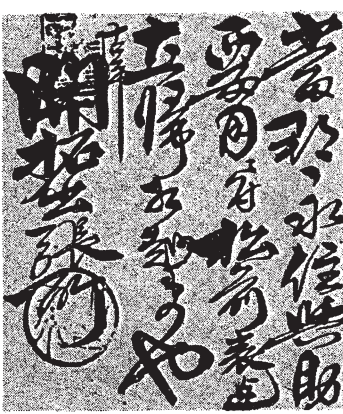
チクワのおいしかったこと。

◇古平開拓出張所 続き

開拓使は明治三年、運上屋の建物を借り上げて古平開拓出張所とし、出張所の役人には少主典北川誠一ほか五名が任命されました。



役所の名称は、古平御用所から古平開拓出張所に替わりましたが、職印はそのまま使われていて、明治三年に発行された通行手形には、同じ職印が押されています。



当郡永住興助要用二付松前表・立帰相越もの也

明治三年 古平開拓出張所

開拓使では運上屋から収納蔵三棟のほか、米蔵や文庫蔵などを買い上げて設備を整えました。

北海道では、蝦夷地の時代から米には難渋していました。内地での凶作や米の運搬に支障があると、すぐに米が不自由する状況でしたので、幕府の頃から主な地域に米穀

— 蝦夷地から北海道へ — 地方自治の移り変わり

を貯蔵し、備米としていました。

開拓使も明治三年、早々に食糧の確保に努め、近くでは小樽・忍路・余市・古平・美国・積丹・岩内などの各地に倉庫を用意して保管させていました。古平郡では四六〇石(三四五)この備米が割り当てられ、古平郡役所の頃は運上屋の蔵にこれを保管していて、この中には困窮者の下げ渡し米もふくまれていました。

また、それまで運上屋で行なっていた駅通(手紙や荷物などをリレー式に引き継いで運ぶ。駅制として古い時代からあった)は村持ちとして、その都度代価を支払うことになりました。

←古平郡駅通「御用状請印帳」↓

覚

一、御用状 表封

美国話 古平詰

御用 人足札式枚

右の通り六月二日御下渡し
相成直三継立仕候 己上

駅所

覚

一、御用状 式封

美国

岩淵佐七殿

古平詰

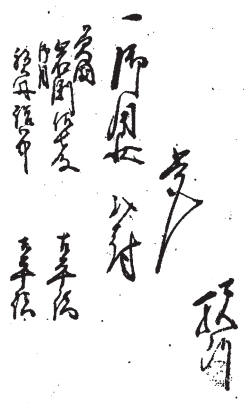
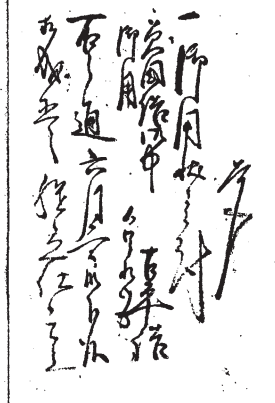
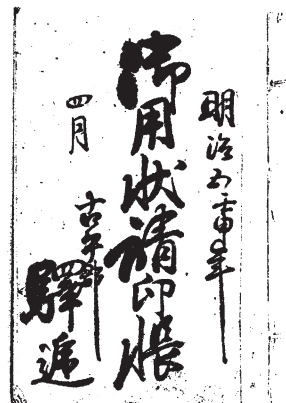
御用

積丹詰御中

古平詰

◇贖目貫一郎の日記

明治三年、仙台の旧岩出山藩主伊達英橋に従って、空知に入植するために、実地検分に訪れた際の贖目貫一郎(もすめかんいちろう)が、古平にも立ち寄ったときの日記があります。



「四月十五日

朝五ツ時(午前八時)頃、美国を出発、殿様はお歩きになられる。私は馬に乗る。山を二つ越え山中で鶯の声をきく。桜の花は今が盛りである。残雪がところどころにあり、海岸には漁小屋が多い。美国と古平の境の山頂より東方海上に増毛山が見えた。二里(約八キ)ばかり歩き、四ツ時(午前一〇時)頃古平に着く。大きな入り江があつて、人家が四、五百軒もあり、岩内に次ぐ場所である。船も十艘ほど停泊していた。はるか向こうの海中に、竹筒を立てたような奇岩がそびえ立っていた。ローソク岩という。この本陣で休憩し、舟で余市(向かう。余市まで海上四里十二町(約一七・四キ)の間、山嶺を右に見て南に向かつて走る。この間、山ろくや谷間に漁小屋がある。皆、棚を造つて鯨を干している。八ツ時(午後二時)から雨が降る。七ツ時(午後四時)、余市に着き本陣に泊まる。人家が二、三百軒ある。日暮れになって雨がますます強くなる。この日の行程六里十二町(約二五・四キ)。日暮れに雨の中を同所沢町の右側、中程より先の薬湯屋を

訪ね「リツ女」に会い、中川より依頼された書面を渡す。古平近海の海水が黄白色なので、舟子に聞くと、鯨の白子で濁つたのだという。」

この記録を見ると、埋め立てして丸山町となる以前は、大きな入り江であつたこと、人家が四、五百軒もあり、大きな町並みを形づくつていたことなどがわかります。

(なお、日記の内容は多少ことはを言い替えております)

◇場所請負人が場所持ち

明治二年、それまでの場所請負人制度を廃止することになりましたが、この年一月二十九日、開拓使の島判官ら七人が、銭函仮役所に西地の場所請負人一七人を呼び集

郡

古平郡のような「郡」というのは、いったいな

市にはありませんが、町村には必ず〇〇郡〇〇町というように郡名がついています。古平郡は古平町、積丹郡も積丹町だけの一郡一町ですが、余市郡には、余市町・仁木町・赤井川村があり、虻田郡には、俱知安町・ニセ町・京極町・喜茂別

めて、請負人廃止について申し渡したとあります。

古平場所を岡田家から譲り受けた種田徳之丞は、ここで大勢いる使用人の処置に困り、幌泉郡での昆布漁を浦河御役所に願ひ出た書面があります。

(種田徳之丞は、当時、現在の室蘭、幌別でも漁場を持つていて、浦河御役所の願人は伴和三郎となつてゐる)

◇「北海紀行」より

加賀の人で、「北海紀行」を編集した林頼三は、明治四年の古平の戸数などを記していますが、これは古平に来て実際に調べたものではなく、小樽に滞在して記したものといわれています。

村・真狩村・留寿都村のほか虻田町・豊浦町・洞爺村など、支庁をまたいで六町三村があります。

現在は郵便番号が普及して、住所の表示も簡単になりましたが、それでも住所にはまだ郡が使われています。

郡という名称は規則によるものではなく、地方公共団体(ここでは町村)の単に地理的な名称なのです。

これによりすると、古平郡は戸数二八四戸で、各村落ごとの戸数は次ぎのようになっています。

ラルマキ(沖町)二三戸・ヲラスツ(歌棄町)一五戸・メナシトマリ(沢江町)二三戸・浜中(浜町)九五戸・メタレ(港町)四〇戸・弁財トマリ(入船町)八二戸・ヘルカルウス(群来町)六戸 合計 二八四戸、アイヌ三五戸、人口一一四人

また、この頃の調査といわれる「古平郡山々生立木所分並開墾地絵図」では次ぎのようです。

沖村 一六戸・浜中村 一二四戸・歌棄村 三〇戸・沢江村 一六戸・垂美村 三九戸・群来村 二八戸・谷地・入船町 三七戸

合計 三二〇戸

明治三年(一八九〇)に、府県制と共に郡制がしかれ、地方制度は府県・道・郡・市町村の三段階で始まり、郡長もおりました。

その後、次第に郡の必要もなくなつて、大正二年(一九一三)郡制は廃止になりました。

現在の郡の多くは百十数年前の、郡長が管轄していた頃の区域をそのまま引き継いだもののなのです。



吉平町岬短歌会

登校前朝々髪を梳きくれし母を思へば今になつかし

池田 テル

梅の咲く南の友へ送らむと道の雪壁バックに写す

鈴木 時子

川べりに山ほど積もりてゐし雪を一斉にとかす日照りの嬉し

竹内 コト

やうやくに雪解け水の増す流れ日差しを浴びて川面の光る

田中 香苗

波の花道に舞い散る海を見つつ車走らす友を見舞ふと

丹後 初江

榎法華海岸に湧く温泉の粹乗り越えて満潮うねる

寺内 りょう

雪の上に出でし一位の天辺を丸く刈る夫春日を浴びて

東 美知

散策の道のぼりつつ見上げるに千切れ千切れの春の雲うく

堀 典子



吉平俳句会

早春の日差をあびて海猫浮寝 斉藤波留

倒木の形となりて雪積もる 山口悦子

小気味良く叩く若布の香も腕に 越野敏雄

春光や船脚重く寄港船 大和田絵伊

はてしなく続く樹氷や空青し 高橋重子

まだ固き苔にほのか花の彩 仲谷比呂古

折紙の雛一对にあらかな 室谷弘子

励ましのつもりか雪間青き空 泉清三

空の色雲の流れに春の色 外山俊久

淡雪の海に消えゆく船の音 渡辺嘉之

やはらかき春日に肩を抱かれをり 堀典子

雪解の園児びちやびちや坂道を 本間寿昭

早春の怒濤を鎮めざる岬 越野清治

教科書のいまゝむかし

◇検定教科書

明治一九年に初代文部大臣となつた森有礼は、教科書を検定制度に改め、すべて教科書は文部大臣の検定したものでなければならぬとして、国の統制を強化しました。

明治五年に学制が公布された頃の教科書は、単に欧米の教科書を翻訳したものや、文部省はただ適当と認めたものを広めたりする程度であつて、どんなものを教科書として使うのかは、全くそれぞれの地方に任せられていました。

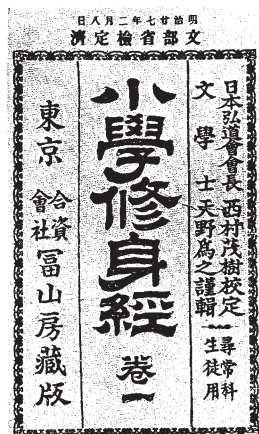
明治一〇年頃には、府県ごとに一定の様式で文部省に届け出るようになりましたが、明治一九年になつて教科書検定制度となつたわけです。これには、当時盛んになつてきた自由民権思想に対する統制の意味もひそんでいました。

◇教育勅語

明治三年になると、その後の日本の教育の基盤ともなつた教育勅語が發布され、それからいつそう国民の思想を統一する方向に向かうことになりました。これには、大資本による経済活動が発展してきたことが深く関係していました。

この教育勅語によつて、その後の修身の教科書はすっかり変わりました。低学年から「てんしさま」「くにのため」という言葉が出てきて、以前の教科書と比べて見ると「孝」が中心

← 文部省検定済教科書



であつたものが、「忠」へと移つていったことがわかります。

◇画期的な教科書

明治一九年に文部省から出された『読書入門』は、国語教科書としてはこれまでになつた新鮮なものでした。ドイツの文芸誌を参考にし、それに作者の考えをとり入れたもので、歌詞風のすぐれたものが多く入っていました。

「まなべよ、まなべ、たゆまずうまず、いそげよ、いそげ、まなびのみちを、」

この読書入門に続いて翌明治二〇年には、話し言葉の口語体を取り入れた尋常小学読本が巻一から巻七まで出て、子供の遊びや童話などが教材となりました。このときの巻一に「桃太郎」が初めて登場したのです。

この小学読本は、全体として児童の心情にも適していて、子供達の興味を呼び起こすように工夫されていました。

また、一般の出版社からも特色のあるものが発行され、金港

← 評判となつた読書入門

小学校教科用書

読書入門

明治十九年九月 文部省編輯局

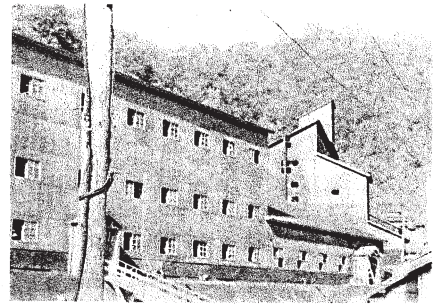


堂からのものは、巻一の一ページ目には色刷りでボタンの花の絵があり、次ぎのページからは「ハ。ハナ」「ハタ。タコ」「コマ。マリ」などとあつて、これは後の国定教科書にも影響を与えることになります。

古平町史年表

昭和12年 (1937) ~ 続く

- ▲満州事変記念として、古平連合青年団が婦人団体と合同で旗行列や神社参拝を行う
- ▲余市～古平間定期航路に新造船の蛟龍丸 (38ト) が就航する
- ▲省令により全道の底曳網の取締りが強化され、178 隻の底曳船が73 隻に減船される
- ▲古平連合青年団が、新設された中島グラウンドで陸上競技大会を開く
- ▲古平防護団発会式が古平小学校で行われる
- ▲稻倉石小学校児童保護者会が結成される
- ▲稻倉石鉱業所の20ト浮遊選鉱場が完成する
- ▲古平連合青年団が、中島グラウンド周辺にヤチダモ (高野平治寄贈) や本陣の沢から掘り起こしてきた樹木などを植樹する
- ▲植樹や衛生事業に功労があり、植樹翁と異名のあった初代高野平治が死去する
- ▲大典記念古平信用利用組合が、購買・販売事業を兼営することになり、無限責任古平信用購買販売利用組合と改称する、大典記念という名称が外れた
- ▲入船町に入船支所を開設して購買・販売事業を始め、魚菜市場を開設する (当時の漁業会市場)
- ▲古平連合青年団員が古平小学校に宿泊し、講話や教練などを内容とした「一夜講習会」が行われる
- ▲古平に入港したギリシャ船について取り調べのため道庁から係官が来町し、船は小樽港に回航される
- ▲南京陥落奉祝旗行列と、夜になり提灯行列が行われる
- ▲イワシ流し網が豊漁で、2,900 石 (約2,200ト) を漁獲する
- ▲小樽区裁判所古平出張所が丸山麓の高台に移転する
- ▲吉野金冶商店がスケソのみりん干しをローラーで伸した製品を「鯨乃華」として製造販売する
- ▲その後、浜町・渡辺仁太郎も「味の肴」として同様のものを製造する
- ▲軍馬保護法により軍用保護馬指導員が任命される
- ▲稻倉石鉱業所が私設の稻倉石消防団を組織する



↑ 稻倉石鉱業所浮遊選鉱場



↑ 南京陥落を祝い、師走の新地町を通る児童の旗行列

→ 港町・吉野金冶商店が製造販売した鯨乃華のレッテル
一名・ロールド明鯛 (シマエ)



感謝状
高橋健一殿
貴下は十年間自治消防団
第三委員として稻倉石鉱山
における火防並に災害防止
に全力を盡され今日完全なる自
治消防団の発展を得た事
に依り、誠に熱意賜り、
他の範とすべきであり、
茲に謝状を呈上致す
昭和十二年五月
林大雄 敬啓
稲倉石自治消防団

↑ 稻倉石鉱業所自治消防団の感謝状・高橋健一